

# 佐久間象山の洋学研究とその教育的展開

## －幕末期における軍事科学を媒介とした洋学の普及現象－

坂本 保富\*

### はじめに

幕末期日本を代表する信州出身の歴史的人物である佐久間象山（1811-1864）。彼の名は、明治以降の日本近代化の在り方を象徴的に表現する思想的な言辞「東洋道徳・西洋芸術」と共に想起される。欧米列強諸国の侵攻を眼前にして、国家人民の対外的な独立安寧を至上課題とする幕末期。その幕末動乱の時代に、象山は、アヘン戦争（1840-1842）を契機として逸早く偏狭な鎖国攘夷論を脱却して、幕藩意識を超えた国家観念に目覚め、「西洋の衝撃（Western Impact）」に対する日本人の思想的あるいは学問的な対応の仕方を、「東洋道徳・西洋芸術」という特徴的な観念形式で指示したのである。

日本近代化の端緒を黒船来航とみるのが歴史学上の一般的な理解である。だが象山は、それよりも遙か前に、開国進取を主張して西洋科学の積極的な導入を説き、私塾教育などの社会的活動を通じて、「東洋道徳・西洋芸術」思想を実践的に展開した。日本人の精神構造や思惟様式に融合し同化した伝統的な儒教思想を基盤に、異質な文化風土に形成された洋学の受容を積極的に説く象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想は、幕末期という時代の転換期における儒学的な洋学受容の理論として認知され、全国的な規模で広く普及し機能した。

洋儒兼学を基本に新たな実利有用の学問構築を探求しようとする象山の思想は、幕末維新期の日本近代化の在り方を巡る政治動向と密接に関連して、新時代に求められる「人材」としての新たな指導的日本人像とその教育的な実現を素描した。彼の提唱実践した「東洋道徳・西洋芸術」という思想は、江戸幕府の開幕以来、儒教を学問教育の対象としてきた日本人、取り分け政治的支配層である武士階層への洋学（蘭学を媒介とした西洋の学問）の普及拡大を可能にする理論的な根拠を与えるという歴史的役割を担ったとみることができる。

---

\* 信州大学 全学教育機構 教職教育部 教授

本稿は、筆者の「東洋道徳・西洋芸術」思想に関する教育史的研究（幕末洋学教育史研究）の一環をなすものであるが<sup>(1)</sup>、特に本稿では、東洋の伝統的な学問思想であった儒学的視座から、象山が、洋学研究に向かう経緯と理解の在り方、更にはその教育的な展開過程などを、象山に関する基礎史料の分析を通して闡明することを研究課題としている。

## (1) 西洋への注目と蘭学の学習

隣に清朝中国にアヘン戦争が勃発する前年（1839）、日本では「蛮社の獄」という洋学者弾圧事件が起きていた。洋学研究グループ「尚齒会」の主要メンバーであった高野長英（1804-1850）は捕縛され、獄中で『和寿礼加多美』<sup>わすれがたみ</sup>（別名「鳥の鳴音」）を草し、「夷狄<sup>いてき</sup>（野蛮な異民族—筆者注、以下同様）の学を奉ずる蘭学者杯の彼是と論じぬるは、世の嘲譏<sup>ちやうき</sup>を受けるは逃れぬ事にこそあれ<sup>(2)</sup>」と、当時の蘭学を取巻く日本国内の極めて排他的な社会状況を記している。「夷狄の学」としての蘭学を学ぶことが、為政者はもちろん社会一般から異端視され、特に幕府当局からは危険視され弾圧されるという苛酷な時代状況、それがアヘン戦争が勃発する直前、明治維新を迎える約30年前までの、日本の西洋諸国や西洋の学問に対する基本的な認識であり対応であった。

天保4年（1833）に念願の江戸遊学をはたした象山には、アヘン戦争の情報を入手するまでは、西洋諸国や西洋の学問への関心は全く認められず、専ら「天下に繋り有ることを知る」という鎖国下の閉じた日本の世界観の枠内で<sup>(3)</sup>、朱子学を正統とする自己自身の儒学的な役割認識を志向していたのである。

象山は、最初の江戸遊学において、林家塾頭で幕末期の儒学界を代表する碩学の佐藤一斎（1772-1859）に師事して学問の研鑽を積み、朱子学者としての大成を期して自己自身の学問的な使命感や主体性の基礎を確立した。彼は、その学問的な成果の具体的な実践の場を、まずもって自藩の信州松代藩に求めた。すなわち最初の江戸遊学から帰藩した天保7年（1836）には、学政一致・政教一致による松代藩の藩政改革に意を注ぎ、更にアヘン戦争が勃発する前年（1839）には、再度の遊学が叶うと、江戸に私塾を開設して儒学教育を始めるなど、「東洋道徳」（儒学—特に朱子学の説く人倫道徳に関する学問）の普及・徹底による理想社会実現への可能性を積極的に探究していったのである。

だが、学問の都である江戸で朱子学者として学界デビューした意気軒昂な青年の象山にとって、隣に清朝中国に起きたアヘン戦争の情報は、驚天動地の歴史的な大事件であった。天保13年（1841）10月9日付の書翰には、国家の存続に関わるという彼の危機感が、次のように記されている。

時に清国英吉利と戦争の様子は近頃御伝聞候や。<sup>たしか</sup> 慥に承候とも申かね候事に候へども、近来の風聞にては実に容易ならぬ事に存ぜられ候。事勢に依り候ては、唐虞（古代中国の堯舜時代）以来礼楽の区、欧羅洲の腥穢<sup>せいわい</sup>（生臭い汚れ）に変じ申されまじきとも申難き様子に聞え、<sup>さてさて</sup> 扱々嘆はしき義に之れ有り候。万一又清国に大变革御座候節は、本邦とは僅かの海路を隔て候のみ（中略）本邦の患とも相成るべき事と存ぜられ候。よしや彼より我を犯し候心なく候とも、兵法にもその来らざるを待<sup>たの</sup>まず其待<sup>まつ</sup>あるを待むとも申候へば、国本を固くし海岸防禦の事<sup>（ママ）</sup>備具致し候様、本邦に生を受候ものは願はしき事に之れ有り候。<sup>(4)</sup>

世界四大文明の一つである豊かな中国文明を生み出した中国は、古代日本より「人倫道德の道」を基調とする文明開化の宗主国であり、正に「唐虞以来礼楽の区」として日本の理想社会モデルと考えられてきた。その中国が、西洋（イギリス）の近代科学の成果が誇る圧倒的な軍勢力の前に惨敗し、国家主権や人倫道德が蹂躪されてしまったという事実に、象山は驚愕し衝撃を受けたのである。しかも、そのアヘン戦争は、一衣帯水の日本にとって決して他人事ではなく、国家人民の存亡に関わる危機的時代の到来を象徴する歴史的な出来事として、象山には深刻に意識されたのである。

それ故、アヘン戦争後の象山にとっての最重要課題は、もはや儒教社会における理想社会の実現という既存の日本的な枠組内には止まりえず、東洋とは全く異質な西洋を如何に認識し位置づけて、日本人の主体的な対応方策を奈辺に求めるべきか、という一点に問題の関心が集中していった。強大な軍事科学を誇示する西洋列強の威力を眼前にしたとき、朱子学者を自負する象山の教育観、学問観、そして世界観が大きく思想的な転回を始めたのである。

近世後期とはいえ、19世紀半ばの日本社会、とりわけ学問的な知的世界においては、なおも普遍的かつ有効的な学問思想として承認されていた儒学の論理的視座から、西洋を視野に入れ統合した新たな学問の全体像を如何に構想すべきかという学問的課題が、正に不可避的な時代状況の下で極めて現実的問題として、象山には自覚されていったのである。特に、彼の問題認識を形成し支えていたものは、日本社会の経世済民を志向する強烈な武士意識であり、その学問的な達成を求める朱子学者としての実践的な使命感に満ちた役割認識にあった。象山は、学者である前に実践躬行を旨とする武士であり、武士である前に愛国心に満ちた日本人であったのである。

だが、アヘン戦争を直接的な契機とした象山の西洋への関心は、直ちに彼をして洋学研究に向かわしめたものではなく、ましてや「東洋道德・西洋芸術」という儒学的洋学受容の思想を彼の内に誕生せしめたわけではなかった。

アヘン戦争に関する最初の象山史料は、前述の天保13年（1841）10月9日付の書

翰であるが、奇しくも同年5月には藩主真田幸貫（1791-1852, 松平定信の次男）が老中海防係として幕閣に参画することとなる。その藩主から顧問役を命じられた象山は、以後、日本の海防問題に最も強い関心を示し、洋学者たちとの交流や翻訳書等を手掛かりに、アヘン戦争の顛末に関する様々な情報を収集し分析して、極めて冷静に事実の認識へと向うのである。と同時に、同年9月には、「御内意を受け候て西洋法の火術を学」ぶべく、当時すでに西洋砲術家として著名であった伊豆韮山代官の江川担庵（1801-1855）に入門し、高島流西洋砲術の実践的な修得も始め、短期間で江川塾第1号の免許皆伝を受けている<sup>(5)</sup>。

以上のような間接的な西洋情報の獲得と分析に約2年間も精励した後、弘化元年（1844）、ついに彼は、原書による直接的な西洋知識の獲得と西洋理解を目指して一念発起し、オランダ語の修得によるオランダ原書からの洋学研究を決意するに至るのである。このとき象山34歳、当時としては晩学であった。

## (2) 蘭学の学習過程とその儒学的な意味づけ

すでに朱子儒学者として一家をなし江戸に漢学塾を開いていた象山の洋学研究は、オランダ語の文法習得という最も基本的な学習から始まる。象山は、当時の蘭学界を代表する坪井信道（1795-1848, 蘭方医で江戸に蘭方医学塾「安懐堂」「日習堂」を開設）や杉田成卿（1817-1859, 杉田玄白の孫で坪井信道の門人、幕府の蕃書調所教授）などとも親交があり、最新の西洋知識を入手できる豊かな学問的人脈を有していた。蘭学界の巨頭である坪井塾に入門して蘭学を学ぶ決意をした象山は、坪井から塾長の黒川良安（1817-1890）という人物を紹介される。越中富山藩医の長男に生まれた黒川は、シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）に就いて西洋医学を学び、その後は坪井に師事して蘭学を極め、坪井塾の塾頭を務めるほどの蘭学者となった。本来、黒川は西洋医学者であったが、彼の学問は、西洋の化学・天文学・歴史学・兵学などの広範囲に及び、幕末期を代表する洋学者であった。

この黒川を、象山は江戸木挽町（現、東京都中央区銀座）の自塾に住まわせ、オランダ語の語学教授を受ける代わりに漢学（儒学）を黒川に教授するという蘭漢交換教授を始める。天保15年（1844）6月、象山34歳のときであった。当時の様子を、彼は次のように記している。

此節、私方へ黒川何がしと申蘭学生参り居り候。これは一体加洲<sup>(ママ)</sup>（加賀）の産に御座候が、幼年の節より長崎に遊びて蘭学を修業致し、中々達者なる事に御座候。此節、此表にて第一等に唱へられ候ものに御座候。この人、漢学には不案内の事に候故、私に益を求め候念慮<sup>ねんりよ</sup>（思い）かねて候ひし所に、又私に於ては蘭学に不案内

に候間、互にその長所を交易いたし候はんと約し候て、此節よびよせ申候。先頃、御買上げに致し候蘭書を読み候所、大に益を得申候。<sup>(6)</sup>

当時の蘭学学習の一般的な階梯は、後に緒方洪庵（1810-1863）の門人である福沢諭吉（1834-1901）や長与専齋（1839-1902, 適塾の塾長を勤め、後に第2代文部省医務局長や東京医学校長などの要職を歴任し貴族院議員）が、自らの適塾での学習体験を記録している学びの形態が、すでに一般的に確立されていたのである<sup>(7)</sup>。すなわち、象山門人である西村茂樹（1828-1902）が、「最初蘭学を学ぶに、先ず文典二冊の素読を受け、夫より一通り会読を為す。是を畢るに三年を費す。夫より窮理書（おわ理化学書）を読み、夫より医書に移る<sup>(8)</sup>」と、幕末期における蘭学学習の一般的な階梯を記している通りであった。

入門者は、まず、「マートシカッペイ」（*Maatschappij*, 出版社名）の文法書である「ガテンマチカ」（*Grammatica* 文法篇）と「セインタキス」（*Syntaxis* 文章編）の両書を習得するところから始め、それを卒業した後に各専門の蘭書読解の課程へと進む。象山の蘭学学習においても全く同様の階梯がとられ、まず両文法書の習得から開始された。彼は、生来の努力主義を発揮して不眠不休の末に、翌年の弘化2年（1845）2月には、両書を卒業していることが確認できる<sup>(9)</sup>。

彼はまた、入門文法書を習得する合間においても、「洋文の法を以て原書を読み候<sup>(10)</sup>」と記している通り、黒川の指導の下で専門書の読解にも挑んでいた。例えば、早くも弘化元年（1844）7月付の象山史料に、「此節カステレインと申書の土類の吟味に係り候所を日々三枚宛読候<sup>(11)</sup>」と、蘭学の原書解読の学習が行われていたことが記されている。そこに「カステレイン」とは、Kasteleijn P. J.: *Chemische en physische oefeningen, voor de beminnaars der schei-ennatuurkunde in' t algemeen, ter bebordering van industrie en oeconomiekunde, en ten nutte der apothekers, fabrikanten en trafikan-ten in' t bijzonders, 3 dln., Leydnen, 1793-1798*, であり、その内容は産業・経済・商業・工業・薬学など幅広い西洋科学に関する知識を網羅した一般的な理化学書であった<sup>(12)</sup>。

入門文法書を卒業した後の象山は、「西洋兵書を昼夜研究精仕候<sup>(13)</sup>」と、彼の最大の関心事である海防問題に関する西洋兵学書や西洋砲術書を中心としたオランダ原書の解読研究に没頭する。だが、彼の研究内容は、西洋軍事科学に関する知識技術のみに限定されていたわけではなかった。好奇心の旺盛な象山は、極めて多方面に亘る実利有用の西洋知識の獲得を目指して精力的に研究活動を展開していった。

象山は、オランダ原書の翻訳で得た西洋知識を可能な限り実験観察して、西洋の知識技術の真偽を確認し、そこに貫通する「理」（真理、理法）が東洋の朱子学が説く普遍性



や法則性と符合するものであることを認識する。机上の観念的な理解による空理空論を厳しく批判する象山は、徹底的に格物窮理（物に格<sup>いた</sup>りて理を窮める）という朱子学の学問精神を発揮し、「小弟の凡人にまさり候所は、書上に於て研究候事直に実事に施こし、誤りを成し申さず候事<sup>(14)</sup>」と自負するほどの徹底した科学的精神をもって、洋学研究の実験的な理解を深めていった。

その結果、象山は、「西洋人とても三面六臂も之れ無く、矢張り同じ人にて本邦人なりとて片端ものにも之れ無く候へば、よくその書を読み考へをつけ候はず、必同じ様に出来候はんと存じ取掛り候。果たして何の苦も候はず出来申候。<sup>(15)</sup>」との確信に至る。学問研究に洋の東西はなく、人種による能力の差別もない、ということである。洋学に関する知識技術を、実験観察を媒介として獲得した学問探求の実体験に基づく彼の確信は、後に開設する私塾において洋学教育の必要性を門人に指導する場合の基本方針となった。

象山の洋学研究に認められる顕著な特徴は、何と云っても朱子学の説く格物窮理の精神を基本として実験観察という検証手続きを重視し、国家人民に実利有用な実践的な学問を探求したという点にある。それ故に彼は、オランダ原書で獲得した知識については、様々な実験観察や製造工夫を精力的に試み、洋学の知識や理論の検証を可能な限り推し進めていった。その結果、象山は、大砲・火薬・ガラス・望遠鏡・電信機・電気治療器・銀鋇脈など鋇山の発見や採掘・蠟石や硫黄の採取・硝石の製造・温泉の発見・人参や馬鈴薯の栽培・ブドウの採取や植林など、日本近代化の根幹に関わる殖産興業などの諸分野で、数々の発明や発見を成し遂げ、後に「日本における近代科学の先駆者」と評価されることになったのである。

だが、象山は、決して科学者を目指したわけではなかった。彼自身の意識においては、自らを西洋科学者であるとの自覚は全くなかったとみてよい。この点を、象山を理解する場合に看過してはならない。象山の科学的側面での業績に関する評価は、彼自身の学問思想の全体や本質からみれば、単なる枝葉末節のこと、すなわち朱子学の基本原理である格物窮理を実践躬行することによって実利有用の学問を探求する過程や結果において生じた副産物に過ぎなかったのである。

やがて象山は、様々な実験的理解を媒介とした洋学研究の結果、精緻な論理性と合理的な法則性に貫通された西洋近代科学の実理性と実用性を、疑いえないものとして確認するに至る。彼は言う、「漢土の学のみにては空疎の議を免れず、又、西洋の学ばかりにては道德義理の講究これなく候<sup>(16)</sup>」と。ここから彼は、自らの学問研究の最大の課題とする東西両洋の学問を統合した新たな学問観の構築へと向かうのである。その結果、彼は、黒船が浦賀に来港する直前の嘉永年間に至って、東西学術の融合を図った「東洋道德・西洋技術」という儒学的洋学受容の理論に結実する東西融合の思想的世界に到達するのである。

### (3) 西洋砲術教授と私塾の開設

弘化年間には蘭学学習の基礎課程を修了して、実際的かつ多面的な西洋知識を精力的に獲得していった象山ではあったが、黒船が浦賀に来航する前の嘉永期に入ると、その社会的な実践活動に主力を注いでいく。まず、西洋知識の普及・拡大が最も緊要な時代的課題であると認識するに至った彼の関心と努力は、オランダ原書の解説に不可欠な蘭語辞書の編集・刊行という、自らの学習体験から痛感した緊要な課題達成の事業に向けられていった。

当時においては蘭語辞書の絶対数が極めて少なかったが故に破格の値段であり、辞書を書き写した写本でさえもが高価で売買される時代であった。辞書を含めた蘭学書が、如何に稀少価値の高い代物であったかは、福沢諭吉の『福翁自伝』に詳述されている、次のような写本の体験談の通りであった。

写本ということがまた書生の生活の種子になった。当時の写本代は、半紙一枚十行二十字詰で何文という相場である。ところがゾーフ一枚は横文字三十行ぐらいのもので、それだけの横文字を写すと一枚十六文、それから日本文字で入れてある註の方を写すと八文、ただの写本に較べると余程割りが宜しい。一枚十六文であるから十枚写せば百六十四文になる。註の方ならばその半値八十文になる。註を写す者もあれば横文字を写す者もあった。ソレを三千枚写すといいうのであるから、合計してみるとなかなか大きな金高になって、おのずから書生の生活を助けていました。<sup>(17)</sup>

象山門人の西村茂樹も、「余が蘭学を初めし時は、文法は已に板本ありしかども、辞書、窮理書は共に写本の外なし<sup>(18)</sup>」と、辞書や蘭学書の不足による蘭学学習の体験的な労苦を記している。ましてや福沢や西村の蘭学学習に遙かに先んじて洋学研究に取り組んだ象山にとっては、辞書不足は殊更に深刻な問題状況として認識されたのは当然のことであった。

それ故、蘭学学習者の増加による西洋知識の拡大普及が望まれる幕末期の時代状況の中で、辞書の編集・刊行を最も優先的な国家的課題と認識した象山は、次のように述べている。

<sup>オランダ</sup> 荷蘭語彙編輯候に付ては、天下後世の為に遺恨之れ無き様致し度く、字書の類の渡り居り候をば、残らず集め候心得、又本草等の類も是迄詳かならざるをも成る丈け詮議も致し度候に就きよき本草書（薬用となる動植物に関する書物）も之れ無く候に就ては叶はず、又此節急務の火術兵事に携り候事は、成る丈け精しく仕度候

に就ては、火術書兵書の類も成る丈け新しきもの備へ申候。<sup>(19)</sup>

嘉永2年(1849)に、象山は、刊行に向けて具体的な蘭語辞書の編纂作業に着手する。当初の刊行計画では、辞書を皮切りに本草書、砲術書、兵学書などの専門書も順次、編集し刊行していくことが企図されていた。だが、翌年の嘉永3年4月、「内々天文台出役のものより知らせ候。荷蘭語彙<sup>いよいよ</sup>彌板行相成らざる趣にて、山路殿手迄下り候。<sup>(20)</sup>」との連絡があり、手始めにと意気込んで着手した蘭語辞書の刊行が、幕府当局から不許可の決定が下され、洋学普及に向けた象山の出版事業の計画は頓挫せざるをえなかった。

蘭学書の刊行計画が挫折した後、特に嘉永3年(1850)以降における象山の活動は、西洋砲術の教授を中心とした儒学的洋学受容論の教育的な活動展開に中心が移っていく。彼の西洋砲術教授の活動は、すでに前年の嘉永2年から開始されており、同年5月の時点で14名の門人が確認できる<sup>(21)</sup>。だが、その時期には、蘭語辞書の編集・刊行という出版活動が彼の主要な関心事となっていたので、いまだ独自の塾舎を構えた私塾ではなく、松代藩の下屋敷内で副次的な私塾活動として展開していた。それ故に、門人の殆どが同じ松代藩の武士たちであった。

しかしながら、すでに黒船来航前の嘉永2年の時点において、西洋砲術・西洋兵学を専門とする洋学者としての象山の一般的な名声と評価が、全国的なレベルで定まっていたことが、次の同年4月の福井藩資料によって確認することができる。

砲術の上は素より練兵其外知彼の學術ならては相適い難き処、此頃、世上に蘭書出来せる者は総て医学の余緒に出る者なる故、公には兵科専門の洋学者御懇望にて所々御頼有りて御来訪なりしかと、豆州葦山御代官江川太郎左衛門殿、信州上田藩<sup>(ママ)</sup>佐久間修理の外は、悉く医ならぬはなし。<sup>(22)</sup>

嘉永年間以降、全国の有効諸藩は海岸防備に備えて兵制改革を実施し、西洋兵制に基づく西洋砲術の導入をはかろうとした。そのためには、是非とも西洋兵制、西洋砲術に精通した洋学者が必要だったのである。それ故、各藩は競って洋学者を招抱えようとした。だが、西洋兵学・西洋砲術などの西洋軍事科学に精通した洋学者の絶対数は極めて少なく、幕府や全国諸藩の需要を満たすことなど、とても出来る状況にはなかった。

その結果、異様な現象が起きた。緒方洪庵や伊東玄朴(1800-1871, 幕府の西洋医学所取締)など、本来は西洋医を養成する西洋医学塾の出身者を、幕府諸藩が競って採用し、西洋軍事科学の教育や西洋軍事科学書の翻訳・出版を委ねざるをえないという時代状況が発生したのである。従って、「元来適塾は医家の塾とはいえ、その実蘭書解説の研究所にて、諸生には医師に限らず、兵学家もあり、砲術家もあり<sup>(23)</sup>」と記されるがごとく、



オランダ語の修得を目指した西洋医学塾への武士の入門者が急増し、「宝暦明和以来八、九十年間の蘭学は、医師を蘭学にしたるものなれども、弘化嘉永以後の蘭学は士族を蘭学にしたるものなり<sup>(24)</sup>」という、福沢の表現を裏付けるような蘭学全盛の異常な時代状況が現出したわけである。

実は、海防（国防）という軍事的動機で西洋軍事科学に向かい、洋学に入っていた幕末期の青少年たちは、やがて精巧緻密な科学技術を生み支えている西洋近代の様々な専門分化した学問の世界に分け入っていく。その結果、彼らは、維新後の日本近代化過程で、期せずして日本近代化に不可欠な様々な学問分野のパイオニアとなっていくのである。

畢竟するに、日本の近代化は西洋化の現象であるが、それは幕末期の国防という国家意識の下での軍事科学を最大契機とする洋学の拡大普及がもたらした歴史的現象であった、と理解することができる。日本近代化を考える場合、国防という軍事科学的視点を看過したり否定することはできないのである。

かくして、西洋軍事科学の受容が急速に拡大する幕末期という時代状況の中で、武士にして儒学者となり、その基盤の上に本格的に蘭学を修めて洋学者となり、そこから東西両洋の学問を統合した先駆的な人物。それが象山その人であった。それ故、彼の存在は、全国諸藩から注目の的となり、縁故や個人的な入門はもちろんのこと、藩命で集団入門するなど、多くの入門者が殺到する。嘉永3年（1850）7月、三度、江戸に出た象山は、深川の自藩邸（松代藩下屋敷、なお上屋敷は新橋、中屋敷は赤坂）に西洋砲術教授の看板を掲げ、これより積極的に教育活動を展開していく。以後、西洋砲術の修得を目指して全国諸藩からの入門者が急増していく。特に福沢の出身地である豊前中津藩（藩主は奥平昌服、1831-1901、洋学者象山の信奉者）などの場合は、藩主の肝いりで藩挙げて象山塾に入門した。

奥平様よりも昨日又々頼み参り、両三日中おもだち候もの十四人、一同入門いたさせ、夫は日々私方通にいたし、その他百人余は何とぞ高なは（高輪）と申所に其下やしき御座候が、是へ一月三度也五度也出張り候て、其人数ねり立てくれ候様にと申事に御座候。<sup>(25)</sup>

入門者の急増によって、最早、松代藩邸内で教授活動をするには、物理的にも不可能となった。翌4年（1851）の5月、象山は、物心両面に亘る最大の庇護者である藩主真田貫の理解の下で、藩当局より藩邸外に私塾を開設する資金130両を下賜され、日本画の名門・狩野家の私塾の向かい隣に独立した塾舎を構えることができ、本格的な私塾教育を展開していくこととなる。

外宅御手充百三拾金戴き候て、木挽町五丁目、御絵師の狩野殿向へ家を求め引移り候。豊の数八十枚ばかりにて蔵も二ツ之れ有り、大小銃習はせ候空地も少々之れ有り、都合も宜しく偏に上の御特恩と有難き仕合はせと存じ奉り候。<sup>(26)</sup>

#### (4)西洋砲術塾の教育目的と教育方針

象山の西洋砲術の教授活動は、嘉永2年(1849)より開始された。それは、彼自身の蘭学学習を経て形成された儒学的洋学受容論の教育的展開として把握されるべき社会的実践の活動であった。東西両洋の学問に関する当時の象山の理論は、その後の「東洋道徳・西洋芸術」に結実される思想的成熟からみれば、いまだ体系的とは言えず、初期的な段階に止まるものであった。が、その後の教育活動などを媒介とした洋学研究の進展を経て、思想としての統一性や論理性が練り上げられていくことになる<sup>(27)</sup>。

従って、彼の西洋砲術教授という教育活動は、彼自身が、「最初より砲術兵法など教授致し候はんとは更に存じも奇<sup>(ママ)</sup>らず候<sup>(28)</sup>」と門人の加藤弘之(1836-1916, 但馬国出石藩出身、東大総長や帝国学士院長などを歴任)に述べているがごとく、私塾教育の当初より単なる西洋砲術・西洋兵学の知識技術を教授する活動に目的化されていたものではなかった。西洋の緻密な知識技術の裏側にある学問の探究にあったのである。学問探究とその成果である知識技術の関係性における本末論からすれば、西洋砲術・西洋兵学を修得することは、確かに現実的な有効性を有する学びであることは間違いない。だが、それは究極的には西洋の学問探究への契機(入り口)でしかなかった。この論理こそは、象山自身の学問探究を支える強固な自尊心であったとみてよい。象山思想を理解する場合に心得るべきは、彼における西洋の学問探究を巡る手段と目的との本末関係の位置づけであり、それを取り違えたり看過してはならない、ということである。

それ故に、彼が私塾教育で目指した究極的な目的は、当時の武士階層を主対象とする青少年たちに、西洋の学問を本格的に学ばせるべく、開国進取の儒学的洋学受容論を拡大普及させること、そして、そこから更に東西両洋を統合した新たな世界観や学問観を形成せしめ、もって日本人の西洋に対する主体的な対応姿勢と西洋学問への本格的な探究精神を喚起すること、にあったのである。

従って、彼の西洋砲術の教授活動の前提には、「砲術の事は誠に余業にて候<sup>(29)</sup>」という基本認識が明確に存在していた。事実、彼の私塾を舞台とした教育活動は、次の象山史料が示す通り、開塾当初から「儒学」「西洋学」「西洋砲術」という三種の学習者を受け入れて展開されていたのである。

只今の勢にては、砲術門人二三百人に相成候は、遠からずと存じ申候。二三百人

の門人御座候へば、一季の謝儀（授業料）ばかりにても百金にあまり申すべく候へば、くらし方は夫のみにてもつき申すべく、況や儒業並に西洋学の門人も之れ有り候事に候へば、其の表にて医方など内職の様致し候よりははるかに姿もよろしく、第一に天下の益に相成り候事に付何分左様仕度存じ奉り候。<sup>(30)</sup>

だが、西洋砲術や西洋兵学を洋学の枝葉末節とみる象山の教育的意図に反して、西洋列強諸国の軍事的手段による極東アジア地域への侵攻という幕末期の切迫した時代状況は、幕府諸藩における軍備や兵学の西洋化に必要な人材の育成を、象山などの軍事科学系の洋学私塾に求めざるをえなかったのである。それ故に、江戸の象山塾には、西洋の軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）の修得を目的に、全国諸藩から数多の入門者が殺到して盛況を極めた。

開塾した翌年の嘉永3年（1850）になると、幕府（旗本御家人やその家来）や全国諸藩からの入門者が急増する。勝麟太郎（海舟、旗本）、木村軍太郎（佐倉藩）、山本覚馬（会津藩）、小林虎三郎（長岡藩）、津田真一郎（真道、津山藩）、西村平太郎（茂樹、佐倉藩）、吉田大次郎（松陰、長州藩）、宮部鼎蔵（熊本藩）などが入門したのも、この年であった。開設間もない私塾でありながら、嘉永3年当時の盛況を極める入門状況を、象山自身が次のように述べている。

先年中野御代官つとめられ候小谷彦四郎殿（旗本）の孫麟太郎と申人なども入門致し候。旗本衆は是にて兩人、追々是も多く相成り申すべく候。陪臣（大名や旗本の家来）にては日々の様に頼み之れ有り候。もはや此表ばかり五拾人近く相成り申候。塾生も当時蟻川、万之助外に越後様より参り居り候中尾定治郎と三人の上、尚五六人頼入御座候。（中略）只今の勢いでは砲術門人二三百人に相成候は遠からずと存じ申候。二三百人の門人御座候へば、二季の謝儀（授業料）ばかりにても百金（百両）にあまり申すべく、左候へば、くらし方は、夫のみにてもつき申すべく…。<sup>(31)</sup>

象山の西洋砲術教授の具体的内容は、彼が門人に授与した「西洋砲学真伝免許状」に窺い知ることができる<sup>(32)</sup>。概ね、その内容は「小銃」「大砲」に関する「歩兵法」「騎兵法」「砲兵法」の「西洋三兵砲術」であった。西洋砲術の教授内容は、その性質上、極めて実践的であり、従って彼は、野外での砲術操練という実地訓練を重視し、諸藩から製造を依頼された大砲の試演などへの参加を門人たちに課していたのである<sup>(33)</sup>。

だが、象山塾では、実地訓練と共に、「此節一四七の日西洋書輪読（ゼミ形式で順番に原書を会読和訳し解釈検討する教育方法）等も始め置き、御在所表より修業願ひ罷り出居り候ものゝ為に、殊の外の必要のものにて此書御座無く候ては盲者の杖を失ひ、水母

の蝦に離れ候様にて、甚当惑の仕合に御座候。<sup>(34)</sup>」と記されているように、オランダ原書の解説による理論的な洋学の学習もまた重要視されていたのである。このことは、嘉永5年(1852)に象山塾へ入門した加藤弘之が、「先生の兵書砲術書に関する講義を聴き又練兵の事にも従事」したと塾での体験学習を回顧し、「先生が三四日の日毎に蘭書を携て来て講義を致されました<sup>(35)</sup>」と述べていることから確認できる。

それでは、象山が、塾生に対する講義で使用したオランダ原書は、一体、如何なる内容の書物であったのか。具体的に特定することは、極めて困難である。しかし、それは、彼自身が蘭学の学習や研究の過程で使用した西洋砲術・西洋兵学を中心とする蘭学書であったことは確かである。彼が、西洋の知識技術の獲得のために使用しないしは参考とした蘭語の原書は、判明しているだけでも西洋兵学関係書16点、西洋砲術関係書14点、理化学関係書11点、西洋医学関係書5点、蘭語修得のための文法関係書5点の合計50点に及ぶ<sup>(36)</sup>。幕末期における個人の蘭書数としては、かなり多い数である。

以上、考察してきたごとく、象山塾における洋学教授は、門人たちが証言するごとく、西洋砲術・西洋兵学に関する理論と実践とが一体となって編成された教育内容であった。しかし、彼は、西洋砲術・西洋兵学という西洋軍事科学の研究成果のみを、単にそれだけのものとして塾生に教授したわけでは決してなかった。幕末期の危機的な時代状況を反映して、西洋砲術・西洋兵学の知識技術の修得を目的に入塾してくる近視眼的な青少年に対して、彼は、教育百年の大計をもって西洋砲術・西洋兵学は洋学の枝葉末節であること、洋学そのものを原書に当たって学ぶべきこと、原書で得た知識技術は可能な限り実験観察を経て再確認するとい格物窮理の精神と手続きを通して習得すること、これらのことを開塾当初から教育の基本として門人たちに説いていた。門人の西村茂樹は、象山塾への入門動機と象山の洋学教育の基本方針について、次のように述懐している。

佐久間の門に入り砲術を学ぶに及ぶに象山余に謂て曰く、砲術は末なり、洋学は本なり、吾子の如き宣しく洋学に従事すべし、余の如きは三十二歳の時始めて蘭書を学べり、吾子は余の学べる時に比すれば年猶若し、必ず志を起こして洋学を勉むべしと。余、<sup>おも</sup>謂へらく、余、今、西洋砲術を学ぶといへども其意は攘夷護国に在り、已に其術を得れば足れり、敢て彼の書を読むを要せず、道德政事に至りては東洋の教は西洋の上に在るべしと。故に初めは象山の言を以て然とせざりし。<sup>(37)</sup>

象山は、門人たちに「砲術は末なり洋学は本なり」と徹底して訓え諭し、洋学の成果である「西洋芸術」(科学技術)の習得を超えて、それを生み出す基礎となっている西洋学問の探求に向かうべきことを強調していたのである。このような象山の洋学に関する発言は、彼の「東洋道德・西洋芸術」思想を理解する上では看過できない歴史的事実で

あり、そのような考えを基本方針とする教育を、黒船来航前の幕末期に率先垂範していたという事実を知るとき、彼の洋学教育における歴史的先駆性の意義は誠に大きいものであったと言わざるをえない。

それでは、象山が言う「洋学」とは、一体、何か。それは、「詳証術」(オランダ語の<sup>ウイスキュンデ</sup>wiskundeの日本語訳、数学に相当する学問)は万学の基本<sup>(38)</sup>とする「西洋微密の実測度数」の「諸科学」を意味し、具体的には「天文・地理・航海・測量・万物の窮理・砲兵の技・商医術・器械工作等」など、広範に専門分化した西洋の諸科学に亘っている<sup>(39)</sup>。象山は、それらの西洋諸科学に底通する基礎的学問として「<sup>ウイスキュンデ</sup>wiskunde (詳証術)」の意味する内容を理解し、私塾での洋学教育で最も重要視していたのである。

彼の私塾教育について指摘すべき更なる特徴は、「西洋の諸科学」(西洋芸術)を学ぶに際しての学習者自身における主体性の在り様の問題であった。非西洋国である日本に生まれ育ち、先験的に儒教文化が一般化されていた社会の中で、幾世代にも亘って自己の人格と思想の原型を形成してきた幕末期の青少年たち(大部分が武士階層に帰属)が、異国に生まれ育った異質な西洋諸科学(西洋芸術)を学ぶということは、後世の人々の想像を絶する勇氣ある決断と実行が求められる活動であり、単に「彼を知り己を知る」という古代中国の「孫子の兵法」が説く戦略的な動機や意味づけの次元では、学習者の内面心理においてアイデンティティ・クライシス(identity crisis, 自分が日本人であることの自己同一性の危機的状況)を引きおこす危険性が十分に予想された。そこには、当然のことながら「西洋の諸科学」(西洋芸術)を学ぶことの理論的な正統性や体系性に裏付けられた学習行為の主体性が、日本人である学習者の個々人に不可避的に求められなければならない。そうであって初めて、学習者は「西洋の諸科学」(西洋芸術)を学ぶ自分自身に対して心理的な不安や葛藤を抱くことなく、あるいはそれらを乗り越えて、自信と勇氣に満ちた自己認識を形成することが可能になったとみることができる。

このような幕末期における洋学の学習者に予想されるアイデンティティ・クライシスの問題は、正に塾主である象山自身が対峙し超克した問題でもあった。実は、自他共に朱子学者をもって任じる象山自身においては、異質な西洋の学問を学ぶことの矛盾や不安を超克する合理的な到達点として、「東洋道德・西洋芸術」という儒学的洋学受容の思想の成立があったのではないか。そう、理解することができる。

象山は、すでに開塾当初から塾生たちに対して、「皆西洋の学専ら修め申度と申すもの共に候へども、聖賢を知らず候時は大本立ち申さず候<sup>(40)</sup>」との基本的な学問観を提示し、洋儒兼学の教育方針をもって門人教育に臨んでいる。そこには、「漢土聖賢の道德仁義の教を以て是が経とし、西洋芸術諸科の学を以て是が緯とし、只顧皇国の<sup>ごいりょう</sup>御威稜(御威光)を盛に致し度<sup>(41)</sup>」と庶幾う象山の目指した思想的世界、すなわち「東洋道德」と「西洋芸術」を両翼として、皇国日本の国家人民の独立安寧という「大本」(根本目的)を実現



できる新たな学問探究の在り様を教え諭す思想が、象山の私塾における教育実践の内容面からも志向されていたことは確かである。

### (5)象山における「東洋道徳・西洋芸術」思想の誕生

黒船来航の翌年（1954）、象山は、愛弟子である松陰の海外密航事件に連座して幕府に捕縛される。この事件が発生する1ヶ月前の安政元年3月、門人である長岡藩の小林虎三郎（越後長岡藩、美談「米百俵」の主人公）に対して、象山は、「漢土の学のみにては空疎の議を免れず、又西洋の学ばかりにては道徳義理の講究之れ無く候故に（中略）是を合併候にあらざれば完全の事とは致し難く候」と説き、「東洋道徳・西洋芸術」思想の誕生を明確に宣言し、次のように記している。

兎に角此節と成り候所にては、漢土の学のみにては空疎の議を免かれず。又西洋の学ばかりにては、道徳義理の講究之れ無く候故に、縦令人目を驚かし候程の大事業を成し候と雖も、聖賢の作所なすところと懸隔候所之れ有り。依て是を合併候にあらざれば、完全の事とは致し難く候。其事に就き詩、之れ有り。御一笑下さるべく候。

東洋道徳西洋芸	東洋の道徳 西洋の芸
匡廓相依完圏模	匡廓 <small>きょうかく</small> （四角い部分）相依りて圏模 <small>けんぼ</small> （丸い全体）を完す
大地周囲一万里	大地は周囲一万里
還須虧得半隅無	還りて須く半隅 <small>か</small> を虧（欠）くを得る無し

末句の意は、道徳芸術相済ととのひ候事、譬へば亜細亜も欧羅巴も合わせて地球を成し候如くにて一隅かを缺（欠）き候ては円形を成し申さず候。その如く道徳芸術一を缺き候ては完全の者にあらずとの考に御座候。<sup>(4.2)</sup>

だが、象山における「東洋道徳・西洋芸術」という儒学的洋学受容を説く思想の成立は、すでに嘉永2年（1849）に西洋砲術教授を開始した当初において、その原型が認められた。それが、更に私塾教育などの精力的な実践活動を経て、松陰事件に連座して捕縛される頃には、強固な思想的信念にまで練り上げられていた、とみることができる。

次の象山史料も、松陰密航事件に連座して捕縛される直前の書翰であるが、そこには「東洋道徳」と「西洋芸術」との思想的な統一的連関を、具体的な人間の食事に例えて次のように説いている。

人謂おもへらく、泰西の学盛んなれば、孔子の学は必ず衰へんと。予謂おもへらく、泰西

の学行はるれば、孔子の教はますますその資を得んと。泰西の学は芸術なり、孔子の教は道德なり。道德は譬えば則ち食なり、芸術は譬えば則ち菜肉なり。菜肉は以て食気を助くべし。孰れか菜肉を以てその味を損ふべしといふか。<sup>(43)</sup>

西洋の学問（西洋芸術）と東洋の学問（東洋道德）との相関性を、人間の存在に不可欠な食事を構成する「食（東洋道德）」と「菜肉（西洋芸術）」に譬え、両者（主食と副食）が偏りなく相互補完的な関係において調和的に摂取されてこそ、心身の健康を維持し、人間の生きる力を育むことができる。彼は、そう考えたのである。この彼の比喩的な表現は、日本を含めた東アジアの儒教文化圏の側から東西両洋の学問の現実的な本質と両者の相関性を透視して特徴を達観した、実に要を得た説明である。

象山にとっては、西洋諸国は産業革命をなしとげ、近代科学文明の社会を実現したとは言っても、アヘン戦争に象徴される悪逆非道な侵略主義の振る舞いを、道德心のある西洋人の仕業としては理解できず、到底、容認することができなかった。それ故に象山は、人間存在の意味や価値に関わる「道德」の理解や実践において、東洋社会は西洋社会に決して劣るものではない、と考えた。いな、アヘン戦争の顛末に読み取れる西洋社会の残虐非道な植民地獲得の仕業は、道德なき悪魔の所業であるとしか言いようがない。そう、象山は、「力は正義」の論理で植民地獲得に鎬を削る西洋列強の本質を透視し喝破したのである。

かかる象山の西洋認識は、決して誤りではなかった。たとえルソー（J. J. Rousseau, 1712-1778）やカント（I. Kant, 1724-1804）などの説く、深遠な人間道德に関する思想や哲学が西洋近代社会にあったとしても、当時の侵略主義をもって世界の弱者を恫喝し蹂躪し搾取したイギリスもフランスも、そしてアメリカもロシアも、現在の民主主義を標榜するような国々では決してなかった。この厳粛な歴史的な事実こそは、象山の「東洋道德・西洋芸術」という歴史的思想を理解する際の重要なポイントとなる世界認識である。現在を基準として過去を評価したり断罪することは、真に歴史的な理解とはいえない。同時代の現実的な目線で歴史的事実は把捉され理解されるべきである。

しかしながら象山は、頑迷固陋な攘夷論者のごとくに、アヘン戦争に象徴される西洋諸国の実態を道德的側面でのみ西洋を捉え、洋学を全否定する偏狭な態度は決して取らなかった。彼の認識と判断は、極めて冷静であった。日本や中国などが足下にも及びえない強力な軍事科学とそれを生み出している様々な学問、この西洋諸国の現実的側面を嫌でも認めざるを得ない。そのように、科学的精神に満ちた象山は、感情的な攘夷論には与せず、あくまでも格物窮理の精神をもって冷静に分析し認識しようとしたのである。

巨大な黒船を建造して世界の海を制覇する西洋軍事科学の奥に、一体、如何なる学問があるのか。西洋の学問は、自らが探求してきた東洋の学問と、如何なる関係にあるの

か。象山の知的好奇心は実に旺盛であった。はたして両者は、矛盾し対立する関係にあるのか、それとも統合できる結節点があるのか。これらの問題は、象山に「東洋道徳・西洋芸術」思想が誕生する際に、超えなければならない不可避的な思索と判断の極点であったといえる。

だが、象山の朱子学理解からすれば、対立的関係にある両者の矛盾点を止揚し統一する学問的な原理の発見は容易であった。儒学の中でも難解極まる教典である「易経」の説く理論の根本は、絶望の中にも希望が内在し状況打開が可能であることを徹底して説くところにある。それ故に「易経」の理論からみれば、幕末期の危機的な時代状況や西洋学問との対立関係も、まずは現実を現実として受け入れ、そこに認められる矛盾や対立する関係や状況を調和的に止揚し、より高い次元における統一的関係において把捉し、危機的な時代状況を打開する方向性を探究することができる。そう認識し思考する精神（思想）と態度（行動）が、朱子儒学の理解において「易経」を最も重視する象山が依拠すべき基本原理であった。彼は、「易経」の説く天地万物を貫通する「理」の一元的な普遍性への確信をもって、異質と思われた東西両洋の学問を融合し統一しようとしたのである。象山は次のように言う。

宇宙の間に実理は二なし。其の理の在る所、天地も此れに異なること能はず。鬼神も此れに異なること能はず。百世の聖人も此れに異なること能はず。近来、西洋の發明する所の許多の學術は、要するに皆実理にして、<sup>まさ</sup>祇にもって吾が聖学（朱子学）を<sup>たす</sup>資くるに足る。<sup>(44)</sup>

それ故に、象山の「東洋道徳・西洋芸術」という思想は、あくまでも朱子学者である象山の格物窮理を方法原理とする朱子学理解の延長上において成立する思想である。数ある儒学の教典の中でも、数理的思惟を中核として危機的な関係や状況を回避あるいは超克する「易経」の理論を重視する象山特有の朱子学理解を敷衍化した思想、それが「東洋道徳・西洋芸術」思想を誕生せしめた、とみることができる。

いまだ西洋世界の全体像が把捉できない幕末期、しかも、その西洋世界が一方的に仕掛けた軍事的侵攻によって惹起された国家人民の存亡の危機という時代状況化下において、西洋人と全く同じ精神と態度をもって西洋の学問文化を理解することは、「無い物ねだり」と言ってもよいほどに極めて困難なことであったとみるべきである。生まれ育った風土も文化も歴史も全く異なる幕末期日本の現実状況の中で、はたして日本人は、身も心も西洋人に変身することができたのか。この命題は、今日なお日本人に課せられた極めて現代的な課題でもある。

朱子学の基礎の上に洋学を把捉するという象山の洋学理解の基本的な精神は、洋学研

究に向かう弘化4年（1847）の当初から一貫したものであった。このことを、象山自らが、次のように述べている。

朱子の意は程子の説に従はれ、凡天下のものに即て其の理を窮めて知識の量を尽すと申すを、夫にては外馳の弊、之れ有り候間、吾心は即ち理にて天下の万物悉く我に備はり候へば、吾心の理をだに窮め候へば、夫にて事済と申事に成候。西洋の窮理の科なども、やはり程朱の意に符合し候へば、実に程朱二先生の格致の説は之を東海西海に於て皆準ずすの至説と存候義に御座候。程朱の意に従ひ候へば西洋の學術迄も皆吾学中の一端にて、本より外のものにては御座無く…。<sup>(45)</sup>

前述のごとく、象山の「東洋道德・西洋芸術」という思想は、西洋を西洋として、西洋科学を西洋科学として、西洋人と同じ精神や論理で理解し統一した思想ではなかった。このことは確かである。その意味では、論理的な整合性に欠ける折衷思想であるとする西周（1829-1897）など、西洋の学問に本格的に取り組み、西洋人の精神をもって日本近代化に関わろうとした明治以降の西洋文明人の批判には、確かに論理的な妥当性が認められる。

だが、人間も思想も、地理的・風土的・民族的・文化的な諸条件の下で、時間と空間が織りなす歴史的空間としての「時代」と共に生成し存在し展開する。幕末日本に侵攻する欧米列強諸国を如何に理解して位置づけ、日本という国家人民の独立安寧を死守するか。このような眼前の緊急課題に直面したとき、危機的現実を打開し救済する原理と方途を示す実利有用の実学思想として、象山の「東洋道德・西洋芸術」という思想は成立し展開されたものである、と理解することができる。ここに「東洋道德・西洋芸術」思想の、幕末期日本の思想史上における歴史的な意味や特徴が認められるのではないか。

## おわりに

象山が江戸木挽町に開いた西洋砲術塾は、一応、形の上では安政元年4月に起きた松陰密航事件に連座した彼の捕縛事件をもって閉じられた。江戸の象山塾は絶頂期の只中で、僅か5年足らずの短期間で終焉を迎えたのである。だが、門人たちに対する彼の教育活動は、その後の9年間に及ぶ信州松代での長い塾居生活の期間においても、書簡の往復や門人たちの信州訪問による面接指導などの形をとって、実質的には連続していった。しかも、松代での彼の教育対象は、江戸での門人ばかりでなく、地元信州を中心とした新たな入門者も多数受け入れて展開されていた。このことが、次の象山史料でも確認できる。

砲術門人共内々参り候て教授を受け候事（中略）屏居中<sup>(ママ)</sup>責<sup>(ママ)</sup>ての御奉公と存じ候て、教へ始め候所、旧門人の内にも、志御座候もの其事伝聞候て内々罷越し候。其内には小弟の教授候所を執心候て、新入を乞い候ものも之れ有り候。（中略）此節、宅へ見え候もの四捨人計りも之れ有るべく候。<sup>(46)</sup>

だが、蟄居後の松代での彼の教育活動は、もはや西洋砲術・西洋兵学などの西洋軍事科学を教授することが教育内容の中心ではなく、「東洋道徳・西洋芸術」という思想的観点からの「有用の学」（「西洋の諸学問）の探究が中心課題となって展開された。蟄居中における象山の日課の大部分は、「飽迄東西の書を読み書中の賢人君子英雄豪傑を友とし候<sup>(47)</sup>」という学究的な生活であった。が、特にオランダ原書の読解生活を精力的に展開することによって、彼自身における西洋の学問に対する理解が拡大深化し、東西学術の統合への理論形成へと向かっていった。

蟄居生活の中で象山は、「往年分手の後ますます洋書を治め候に就き、医書をも稍々講究候所、其言甚だ確にして隻句も空論に涉り候事之れ無く、漢土の医法の埒もなきものとは実に天地懸隔を致し、是にてこそ造化の功を補ひ候とも申すべく」との積極的な西洋学問への理解と信頼の上に、「和漢の学識のみにては何分不行届、是非とも五大洲を総括<sup>(48)</sup>」した実利有用の学問を求め続け、「東洋道徳・西洋芸術」思想の理論的な妥当性と有効性を再確認していく。実は、蟄居時代の信州松代における彼の洋学研究や教育活動は、「東洋道徳・西洋芸術」思想の吟味と再確認、更にはその思想を継承し実践する人材育成の教育活動として意味づけすることができる。

以上、象山の儒学理解とその特徴、儒学を基盤とした洋学研究とそのプロセス、そして江戸での漢学塾や西洋砲術塾の開設とそこでの教育活動を媒介とした「東洋道徳・西洋芸術」思想の形成過程と教育的展開、等々について考察してきた。筆者は、この40余年の間、象山が提唱実践した「東洋道徳・西洋芸術」思想の研究に取り組んできた。牛歩の如き研究の進展であった。が、その際、常に反芻して自戒してきたことは、思想の理解には時代性が不可決であること、時代が思想を形成し、その思想が時代の課題解決を担って展開されるということ、それ故、思想の内容や特徴を規定する時代性を看過してはならないということである。時代性を無視して、百年後、二百年後の現在という時代の高みから、歴史的所産である過去の思想をみれば、如何様にも理解し評価することができる。現在を基準として過去の思想を捉えるという時代性を無視した思想理解は、決して正当なものとは言い難いのではないか。そう筆者は考えてきた。それ故に筆者は、象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想の理解に際して、アヘン戦争後の幕末動乱期という時代性の下での形成過程と展開過程の分析に関わってきたのである。



筆者は、このような研究に対する精神と態度をもって、象山塾の入塾者の階層性や地域性の解明、他の私塾との比較分析、入塾者の入塾意識や洋学学習過程の解明、また、地元信州の門人たちを主とした未知の門人の発掘と彼らの幕末維新时期における進路や活動などの調査を進めてきた。それらの研究成果については、順次、論文として発表し、実態史を踏まえた思想史研究として一書にまとめあげたい。

#### 【註】

(1) 筆者の幕末洋学教育史研究に関する研究成果の代表的な作品としては、拙著『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館、2004年）、『米百俵の歴史学』（学文社、2006年）『米百俵の主人公 小林虎三郎—日本近代化と佐久間象山門人の軌跡—』（学文社、2011年）などがある。

また、象山研究を中心とした「東洋道徳・西洋芸術」思想に関する論文としては、①『『東洋道徳・西洋芸術』における教育認識の構造と特質』（『東京教育大学教育学研究集録』第16集所収、1976年）、②「象山における儒学理解への前提と特質—幕末期における儒学的洋学受容論成立への主体形成—」（『筑波大学教育学研究集録』第2集所収、1978年）、③「象山研究上の問題点（上）」（下、信濃教育会『信濃教育』第1229号、1989年）、④「象山研究上の問題点（下）」（信濃教育会『信濃教育』1230号、1989年）、⑤「門人帳資料「訂正 及門録」からみた象山塾の入門者—幕末期における「東洋道徳・西洋芸術」思想の教育的展開—」（日本歴史学会編「日本歴史」第506号、吉川弘文館）、⑦「教育者としての象山の面目—『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開—」（信濃教育会『信濃教育』第1455号、2009年）、⑧「日本近代化と佐久間象山—「東洋道徳・西洋芸術」思想の教育的展開—」（アジア文化研究学会編『アジア文化フォーラム』第11号、2008年）、⑨「幕末の先覚者 佐久間象山—日本近代化を推し進めた思想—」（『人間会議』2010年夏特別号、株式会社「宣伝会議」発行）などがある。

(2) 『日本思想大系第55巻』（岩波書店）『渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』所収の高野長英『和寿礼加多美』、同書182頁。

(3) 松陰密航事件で捕縛されとき、江戸伝馬町の獄中で40余年の半生を省みた自省録『省・録』の中で、自己の学問観や世界観の年代別の拡大発展段階を次のように述べている（信濃教育会編『増訂象山全集』全5巻、以下『象山全集』と略記の第1巻に所収の『省・録』、原漢文。同書21頁）。

「余年二十以後、乃ち匹夫の一国（藩）に繋ることあるを知る。三十以後、乃ち天下（日本）に繋ることあるを知る。四十以後、乃ち五世界（世界）に繋ることあるを知る。」

(4) 天保13年10月9日付の加藤氷谷宛書翰（『象山全集』第3巻、215-216頁）。

- (5) 『象山全集』第3巻、222頁。なお、象山の江川塾入門は、江川側の史料「砲術御門人束脩請払帳」によっても確認され、同門人帳の筆頭に象山の入門が記されている(石井岩夫編『高島流砲術史料 葦山日記』、126頁参照)。
- (6) 弘化元年7月7日付「山寺源大夫宛書翰」(『象山全集』第3巻、256頁)。なお、象山と黒川との蘭漢交換教授に関しては、宮本仲『佐久間象山』(岩波書店、1932年)の「黒川良安と先生」(801-828頁)の項を参照。
- (7) 福沢諭吉『福翁自伝』、長与専斎『松香私志』(平凡社、東洋文庫『松本順・長与専斎自伝』所収、1980年)の適塾時代を参照。例えば、緒方洪庵の適塾に学んだ福沢は、自らの体験を踏まえて幕末期の蘭学学習の階梯を次のように記している。
- 「江戸で翻刻になっているオランダの文典が二冊ある。一をガランマチカといい、一をセインタキスという。初学の者には、まずガランマチカを教え、素読を授ける傍らには講釈をもして聞かせる。これを一冊読了するとセインタキスをまたその通にして教える。如何やら二冊にお文典を解せるようになったところで解説をさせる。会読ということは、生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に会頭が一人あって、その会読するのを聞いていて、出来不出来によって白玉を付けたり黒玉をつけたりするという趣向で、ソコで文典二冊の素読も済めば講釈も済み会読も出来るようになると、それ以上は専ら自身自力の研究に任せることにして、会読本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、また質問を試みるような卑劣な者もない。」 福沢諭吉『福翁自伝』(岩波文庫版、1978年)、81-82頁。
- (8) 弘化2年3月付「山寺源大夫宛書翰」(『象山全集』第3巻、305頁)に、「去年中旬迄に右両巻共卒業」と記されている。
- (9) (10) 弘化元年7月7日付「山寺源大夫宛書翰」(『象山全集』第3巻、259頁)。
- (11) 池田哲郎論文「象山蘭語彙」(蘭学資料研究会『研究報告』第54号所収、1959年)、及び東徹『佐久間象山と科学技術』(思文閣出版、2002年)の100-104頁を参照。
- なお、象山が黒川の手引きで解説した蘭学書「カステレイン」の原書綴に関しては、池田論文「佐久間象山と蘭学」(『福島大学学芸学部論集』10-1所収、1959年)と前掲の東徹『佐久間象山と化学技術』とでは、オランダ語のスペリングに相違が認められる。本稿では、象山が使用したとされる真田宝物館所蔵の原書から引用された東徹『佐久間象山と化学技術』(同書102頁)のスペリングとその日本語訳を参照させていた。
- (12) 弘化2年6月27日付「山寺源大夫宛書翰」(『象山全集』第3巻、340頁)。
- (13) 日本弘道会編『西村茂樹全集』(全3巻、思文閣)の第3巻「著作」、319頁「洋学の最初の有様」。
- (14) 嘉永3年4月27日付「三村晴山宛書翰」(『象山全集』第3巻、565頁)。

- (15) 弘化2年5月28日付〔藤岡甚右衛門宛書翰〕(『象山全集』第3巻、329-330頁)。
- (16) 安政元年4月、門人で「米百俵」の主人公・小林虎三郎の父親宛書翰(『象山全集』第4巻、242頁)
- (17) 前掲、福沢諭吉『福翁自伝』、85頁。
- (18) 前掲、『西村茂樹全集』第3巻、320頁。
- (19) 嘉永2年12月15日付「宛先不明書翰草稿」(『象山全集』第3巻、542頁)。
- (20) 嘉永3年4月2日付「望月主水宛書翰」(『象山全集』第3巻、555頁)。以後、再三、幕府に出版許可願を出す認められず。
- (21) 嘉永2年5月28日付「門人中俣一平宛書翰」(『象山全集』第3巻、518-520頁)には、象山門弟が西洋砲術試演を実施したことが、参加門人名の砲弾命中図と共に列記されている。
- (22) 文部省編『日本教育史資料』(1890年、全10巻。1969年に臨川書店より復刻。本稿は復刻版を使用)第4巻所収の「旧福井藩」の部。
- (23) 『松本順自伝・長与専斎自伝』(東洋文庫、平凡社、1980)、111頁。
- (24) 『福沢諭吉全集』(慶應義塾編、岩波書店発行、1960年)第10巻所収「梅里杉田成卿先生の祭典に付演説」、同書252頁。
- (25) 嘉永3年7月16日付「母宛書翰」(『象山全集』第3巻、580-584頁)。
- (26) 嘉永4年6月22日付「八田嘉助宛書翰」(『象山全集』第4巻、15頁)。
- (27) 『象山全集』第4巻、15頁。前掲、拙稿「象山における儒学理解への前提と特質」を参照。
- (28) 嘉永5年10月28日付「加藤弘之宛書翰」(『象山全集』第4巻、106頁)。
- (29) 嘉永3年9月11日「川路聖謨宛書翰」(『象山全集』第3巻、598頁)。
- (30) 嘉永3年7月26日「母宛書翰」(『象山全集』第3巻、598頁)。なお、象山は、西洋砲術家として世間から評価されるのを好まず、次のように述べている(嘉永5年11月29日付「松代藩留守居津田轉より庄内侯への返翰」、『象山全集』第4巻、111-112頁)。
- 「火術門人兵学門人員数の事、是は取合せ三百人も御座候。(中略)当人義、最初より砲術兵法など教授致し候はんとは、更に存じも寄らず候所、一昨々年冬西洋字書編輯致し其の板行伺の為に、出府いたし深川屋敷に寓居仕候内、僅かの間にひたひたと門弟も付き、さては彼れが本業と仕候経学の事は存ぜぬ人多く、結句一個の砲術家の様に世間には申候様に御座候。」
- (31) 嘉永3年7月26日付「母親宛書翰」(『象山全集』第3巻、584-585頁)。
- (32) 『象山全集』(全5巻)の中には、象山が門人に与えた5例の「免許状」が収録されており、それらによって象山の西洋砲術の教授内容を知ることができる。その一例として九州中津藩の門人・島津文三郎に授与した免許状を示せば次の通りである(嘉永6年4月15日付免許状「島津文三郎に与ふ」(『象山全集』第4巻、129-130頁)。

「西洋三兵砲術真伝免許状

- 一 歩兵法 目録有之
- 一 騎兵法 目録有之 但、隊伍進退之法馬術ニ属ス
- 一 砲兵法 目録有之 但、騎砲之法是又馬術ニ属ス

以上

(以下に今後の研鑽向上のための詳細な心得など説論の長文が続くが省略) 」

- (33) 『象山全集』第5巻の巻末に門人録「訂正及門録」が収録されているが、その嘉永6年分と安政元年分は共に「砲術稽古出座帳抄録」となっており、門人たちの砲術操練の実習記録である。それ故に、象山の「訂正及門録」は、緒方洪庵や伊東玄朴などの門人帳とは、形式の内容も全く異なるもので、厳密な意味では門人帳面とは呼べない門人帳関係資料である。
- (34) 嘉永5年正月19日付「松代藩門人中俣一平宛書翰」(『象山全集』第4巻、54頁)。
- (35) 『信濃教育』の「象山先生五十年祭記念号」、1913年)所収の加藤弘之の寄稿文「象山先生につきて」。
- (36) 池田哲郎論文「佐久間象山と蘭学」(『福島大学学芸学部論集』10-1、1959年)において、象山が関係した蘭学書を『象山全集』の中から抽出して解説し、合計50点を確認している。
- (37) 日本弘道会『泊翁西村茂樹伝』(上下2巻、1933年)上巻、29-30頁。
- (38) 『象山全集』第2巻所収の上書「時事を痛論したる幕府への上書稿」(文久2年9月)、同書181頁。
- (39) 『象山全集』第1巻に所収の『省・録』、原漢文。同書9頁)。なお、象山の「詳証術(wiskunde)」の理解に関しては、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ學術受容の一断面-内田五観と高野長英・佐久間象山-』(東海大学出版会、1982年)など、様々な見解をとる先行研究がある。この問題に関する筆者の詳細な検討は別稿において試みる予定である。
- (40) 嘉永3年10月21日付「竹村金吾宛書翰」(『象山全集』第3巻、607頁)。
- (41) 嘉永5年「松代藩留守居津田轉より庄内侯への返翰」(『象山全集』第4巻、111頁)。
- (42) 安政元年3月付「小林又兵衛宛書翰」(『象山全集』第4巻、242-243頁)。
- (43) 安政4年春「孔子夫の画像に題す」(『象山全集』第1巻、「象山文稿」所収、同書77-78頁)。
- (44) 安政元年春「増小林炳文」(『象山全集』第1巻の『象山浄稿 序』に所収、原漢文。同書51頁)
- (45) 弘化4年10月22日付「川路聖謨宛書翰」(『象山全集』第3巻、408-409頁)。
- (46) 安政2年8月20日付「高田幾太宛書翰」(『象山全集』第4巻、363-367頁)。

- (47) 万延元年10月17日付書翰（宛先不肖の書翰草稿、『象山全集』第5巻、247頁）。
- (48) 安政5年3月6日付「梁川星巖宛書翰」（『象山全集』第5巻、9頁）。